〔撮壤集下病疾〕喘息（アエキ）

〔增補下學集上二支體〕喘息（アヘギ）口氣引貌也

〔日本書紀二十皇極四〕二年十一月丙子朔、于時古人大兄皇子喘息而來問、向何處、入鹿具說所由、

〔玄りうこと〕祐天大僧正小山田與清を呵す

さて京傳ある會席上にて、その方が盜說を咎めて、かの說は予が發明なるを、足下自說として唱へらるゝことはなはだ遺憾なりといひしとき、その方まざ〳〵しく大音に、予いかでか足下の說を奪はん、何ぞ證據ありやと、居丈高になつて說破したりしかば、京傳はなはだ逆上せて、論議するうちに、持病の喘息大に發して、痰血を吐し、籃輿にたすけられて家に歸りしが、これより病みて起つことあたはず、つひに病床に憤死したりき、これ其方が氣死せしめたるなる事、人あまた知れることなり、京傳のことを予に訴へて、寃罪をあかしくれよと歎きし故、○下略

痰飲

〔牛山活套上〕痰飲

痰飲ノ病ハ明メ難シ、何ノ病ニモ痰ヲ挾マヌハ稀ナリ、其脈多ハ滑也、多ハ沈弦細ヲ兼ルナリ、

〔諸病源候總論二十〕痰飲候

痰飲者、由氣脈閉塞、津液不通、水飲氣停在胷府、結而成痰、又其人素盛、今瘦水走腸間、漉々有聲、謂之痰飲、其病也、胷脇脹滿、水穀不消、結在腹內兩肋、水入腸胃、動作有聲、體重多唾、短氣好眠、胷背痛、甚則上氣欬逆、倚息短氣不能臥、其形如腫是也、脈偏弦爲痰、浮而滑爲飲、其湯熨針石、別有正方、補養宣導、今附于後、

養生方導引法云、左右側臥、不息十二通、治痰飲不消、右有飲病、右側臥、左有飲病、左側臥、又有不消氣、排之左右、各十有二息、治痰飲也、

〔療治夜話初編上〕治驗